女流文藝雜誌

ビアトリス

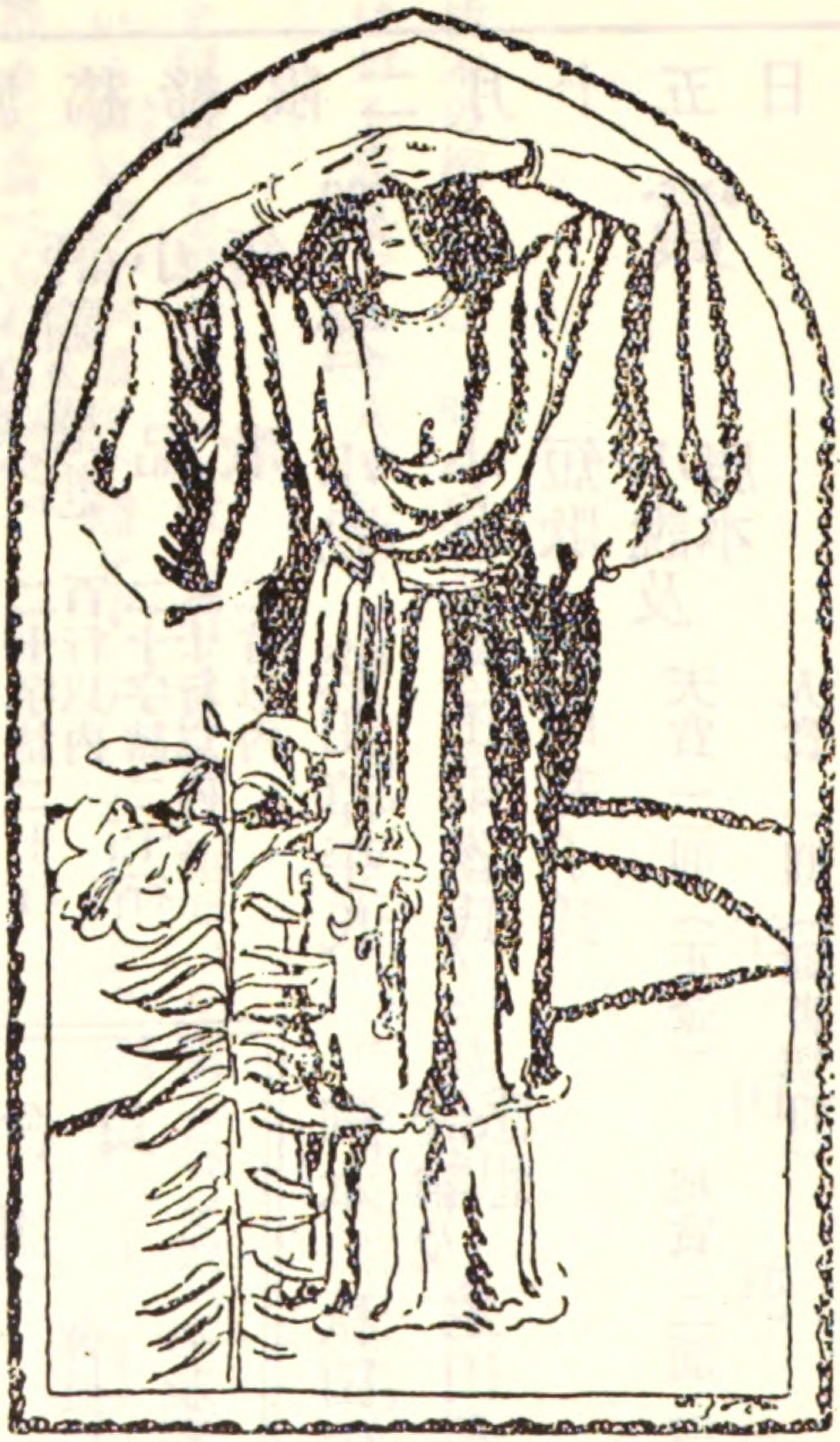


二月號

ビアトリス 二月號 目次

ビアトリス

第二巻第一號



女性

三月一日創刊

一部定價 二十錢

懸賞募集

郵税 一錢五厘

◆原稿締限 二月十五日限◆

規定

小說 二十字詰二十行 百二十行以内

脚本（一幕物） 二十字詰二十行 百五十行以内

評論及感想 二十字詰二十行 百行以内

小品 二十字詰二十行 八十行以内

短歌 二首以内

選者

小說 森田草平氏

小品 秋田雨雀氏

短歌 山田邦子氏

脚本 秋田雨雀氏

評論及感想 生田長江氏

賞

小說及脚本 天賞 三圓（正金） 地賞 二圓（同上） 人賞 一圓（圖書切符）

感想評論及小品 天賞 二圓（正金） 地賞 一圓（圖書切符） 人賞 五拾錢（圖書切符）

女性會會員募集

本誌の三個月以上の前金拂込講讀者を女性會々員と稱す

會員には特に作品の批評添削に應ず

牛込區築地町六番地ビアトリス社

發行所

老年若年

生田花世

乾いた寒い空風が丘の枯木の梢を拂ひ、時々店の硝子戸をがた〳〵と鳴らせた。空には不思議に赤黑い雲が一すぢ張り板にはがし忘れためりんすの赤いきれのやうに殘つて靜かに暮れてゆく或年の大晦日であつた。

店にはあか〳〵と瓦斯と電燈とを點し棄てゝ家の者は奥の六疊で、夕餉の箸を取つてゐた。皆の前には此日食べるものだといふ晦日蕎麥が溫かい煙をすく〳〵と上げて、甘いだしのにほひが邊りに流れ、かけとざるとが取り取りに食べられてゐた。

隣の部屋で間を借りてゐる左千子も——京橋の或る商館の女事務員であつた——そこに招待ばれて、皆んなと一緒にお旨しさうにかけを食べてゐた。

細長い食臺のまはりにはお主婦さんと其の末娘の明日から十一になると云ふ色の黑い松枝とが坐り、向ひ側には梅干のやうにこち〳〵老ひ萎んだ七十を越したおばあさんと、もうつや〳〵と銀杏返

しに明日の髮を結つて、頭だけ際立たせてゐる細面の姉の勢子が並び、左千子が其の傍に向き合つてゐた。

お嫗さんはひとりちび／＼と甜めるやうにしてお酒を樂しんでゐた。これがお嫗さんの餘生の唯一つの幸福であつた。それでいつも朝から夜を待ち兼ねたのである。

不圖お嫗さんは皺だらけの右の手に持つた杯を、お主婦さんの眼に突きつけて見せた。

『何ぢやな』

とお主婦さんは香薬の葱を蕎麥の上にはさみかけながら訊ねた。お婆さんは齒のない口をむぐろむぐろ揉み合はせながら

『まあやん――お婆さんは自分の娘をいつもかう云つて呼ぶのであつた――私この杯いやどすわ』

『どうして？』

『私どしてか佛さんにあげるお茶碗のやうな氣がしてならん……』

かういつてお嫗さんは杯を下に置いた。

『あれ、また始めたね』

と主婦さんは口をずつと前の方に尖らして大きな聲で、

『それならどれを出すといゝんですか』

と訊ねた。お婆さんは目は確かであつたが少し耳が遠かつた。

『おばあさん、どんなのがいるの？』

と傍にゐた勢子も訊ねた。

『うん……元のが……私の元のが……』

とお婆さんは孫娘の方へ頤をしやくつた。勢子はすぐにお婆さんが昨日までそれでのんでゐた元の盃を出して來て、それになみ〳〵とお酒を注ぎながら、

『ねえ、おばあさん、これは私が昨日買ひ出しに行つて、見付けて來たのよ。おばあさんにいゝだらうと思つたんですよ』

と云つた。

お主婦さんは眼許に愛憐のやうな笑を見せながら、左千子に話しかけるやうにして、

『もう直ぐ佛さんになるんだから構はんぢやありませんか』

と呟いた。するとお嫗さんは、

『そいでも厭どすわ』

と言下に不平を述べた。それがいつもの耳の遠いお嫗さんとは思はれない程敏かつたので、向ひにゐた松枝が仰山に笑ひ出した。

『嫌あなおばあさんだよう、聞えたんだわ』

『そいだつてお前、いくら年は取つても死にとうないのや……』

とお嫗さんはむきになつて云ひ譯をした。それで皆んなは一緒に笑つた。

『おばあさんは明日いくつにおなりなさるの』

と左千子は訊ねた。

『七十四だつたかね』

と主婦さんはお婆さんを見た。

『私はなあ、來年で七十四でもぅ三つ取ると喜の字どす』

とお婆さんは左千子の方を見てにこ〳〵した。

『あのなあ、おばあさん、お正月には一升も買ひ込んでありますよ。一升あれば松の內ぢゆうあるわね』

するとお媼さんは目を細くして、

『私一升は厭やどす。二しよも三じよも……』

齒がなくて前に突出てゐる頤（あご）がかう云つた時、てら〳〵と光つた。

『二世も三世もお前（まへ）とともに』

とお主婦さんはまた笑ひながら、。

『旦那をお妾に取られたり、甲斐性（かひしよ）もない癖に何だね』

『うゝん……若いのがよかつたのや』

お婆さんはさう云つて上機嫌になつた。

『おばあさんは醉つ拂つちやつたわ。厭あなおばあさん！』

と松枝がまた反りかへつてなつた。

『お止し！うるさいぢやないか！』

と姉の勢子が叱つた。

それで皆靜かになつたが、もう皆箸を置いてゐた。

此の家ではかうした大晦日は始めてゞあつた。お媼さんは元京都の町はづれの家で此の春までも四十年の間暮してゐた。丹波の篠山から、京都の其の家に嫁いで、七十三になるまでゐた夫の家では、夫の妾の倅が家督を取つてゐたので、お媼さんはまつたく厄介物にせられてゐた。それまでのお媼さんは本當に不幸な生活であつた。けれどもあまりものに屈托しないお媼さんは、苦を苦ともせず、夫が六十七で死んでから十年近くもの間、妾のお里とその倅夫婦との家で、こま／＼と家の仕事を手傳つて暮して來た。その中に、たつた一人生き殘つてゐる末娘のお政が、東京から迎へに來たので、喜んで娘や、孫娘のところに來た。

そのお政――お主婦さんも三十七の時、夫に死に別れてから、今迄寡婦ぐらしを立てゝ三人の子供の總領は藥屋へ小僧奉公に出し、あとの二人の娘を相手に、東京の西の果てのＫ――大學の前で、ミルクホールと雜貨店とを開いてゐるのであつた。

女ばかりの生活に波風は立たず、店にはいつも笑ひ聲が漂つてゐた。

お主婦さんは亭主運の惡いのには懲りてゐたので、娘の勢子のもう嫁入り盛りを過ぎて了ふのを、氣にしながらも手放すのを嫌つてゐた。娘も亦早く家を持つよりも、獨身の氣安さを續けられるまでは續けようといふ氣でゐた。それに、Ｋ――大學の學生達の若々しい姿が出たり入つたりするミルクホールの生活はあまり彼女を淋しくはさせなかつた。

勢子は氣負つた勝氣な女であつた。それで、惡い噂を立てられるやうな事はなかつた。始終學生達の話の相手をしてゐるので、彼女の頭は次第に高尚な事に興味をもつてゐた。

十一月のはじめ不圖知己となつた左千子が、十二月に入つてから貸間を探してくれるやうにと頼ん

だので、勢子は母親と相談をして、ミルクホールの奥の部屋をあけて、用達てる事とした。それは左千子にも亦勢子にも好い都合であつた。二人は毎夜々々箱火鉢を中にして木椅子に腰をかけて、遊びに來る學生達と夜話をするのを樂しみにした。また新しい劇や、新しい繪の展覽會が開かれると、學生達からすゝめられて、いつも二人連れで見に行つた。すると其の話で四五日はミルクホールの夜が更けるのであつた。

『除夜だわね。今夜……』

紅玉(あかだま)の實が、たわ〳〵と葉の間から垂れさがる南天の木の下に、まだ蕾が僅に一片(ひら)黄を吐(は)いてゐるばかりの福壽草を植ゑ合はせた底の淺い四角の鉢を中央に据ゑてある、白布を覆つた大きい卓の上にはいくつかの硝子の圓瓶が並んで、中には、林檎や蜜柑や、ワツフルや、シユークリームやカステラが、食慾をそゝるやうに入つてゐた。ミルクホールの方に來て左千子が腰をかけた時、さう云ひながら雜貨店の方から勢子が來て、革張(かは)りの椅子を引きよせて腰をかけた。

夜はもう九時頃となつてゐた。

『私の二十五もこれでもうおしまひの夜だわ』

と左千子は自分に話しかけるやうに胸で呟いた。

『私は一年の間に何をしたらう?』

彼女は目をつむつて此春からの自分の生活を思つて見た。と、心には最も濃くまた最も悲しく失戀

つて了つてから、それきり何の音信もない。二人の同棲する筈の事を周圍の人々に公然とさせてゐたゞけ彼女の屈辱と苦悶とは大きかつた。彼女は幾度か跡を追つてゆかうとした。けれどもそれを引留めたのは彼女の外のもう一つの生活であつた。それはやがて小說作家とならうと思ふ強い欲望と計畫とを新しい未來の自分に期待する野心のやうなものであつた。

『來年はもつと生き甲斐のある生活をしよう。私の心にも亦私の身體にも不適當な女事務員を一日も早くやめて、いゝ小說を書き、藝術家として世に立つて行きたい。私は悲しい目にあつた。男は私を弄んで塵のやうに棄てゝいつた。けれどもそれは何故であらう。それには色々な複雜な理由もあつたに相違ない。しかし、あまり早く私が人を信じ、あまり早く人を愛しすぎた私の愚直と、私の無智とがこの結果を招いたのだ。

けれどももう私は過去を思ふのは厭だ。それは諦めではない。みんなあゝした事は私の無智の收穫だつたのだ。それを恥ぢて新しく足を踏み直してゆかう……』

彼女は泌々と自分の心にかう敎へるやうに思つた。

二人は無言で話し合つてゐた。

勢子は心の中で商賣の事を思つてゐた。此の店はゆく〳〵は母親と妹との手に殘して自分はまたもつと面白い仕事を始めようといふやうな考が今年の夏から彼女の心には幾度も往來してゐたのである。ミルクホールのまだ收支のたゝない中は彼女は其の經營に興味があつたが、不安がなくなるとつまらなく思はれて來た。勢子はさうした氣象の女であつた。

『ねえ、左千子さん。何か良い仕事がありませんでせうかね。私は自活する婦人の協會のやうなものをこしらへたいと思ひますわ。意味のあるいゝ事でせう？ 何う？』

と勢子は云つたりした。

外の方は靑暗く凍つて、淋しげに風が吹いてゐた。學生らしい足音が街路の下手の方からして、段々に近づいて來るのを二人は待つともなく待つてゐた。其の足音の主はやがてミルクホールの戶を開けて入つて來た。それはいつも來る、林科の齋藤といふ人であつた。齋藤は制帽をかむつて、外套の裾で風を切つて步いて來た。

『ミルクを一杯くれませんか。お勢さん。寒いから熱くしてね』

そして其處にゐた左千子に、

『今晚は……』

そして隆い鼻をした其の若い眼で笑つた。それから手を出して、片手を箱火鉢にかざし、片手で硝子の圓瓶の蓋を取つて、中からカステラをつまんで口に入れた。

『寒かつたでせうね』

と牛乳を瓦斯にかけてから來た勢子が訊ねると、齋藤は、

『寒かつたさ』

そしてまた隣の圓瓶からワッフルをつまんで、むしやくくと一口に押し込んだ。それが可笑しかつたので左千子も勢子も笑つた。

『何處へいつてらしつたの？』

『保證人の家へさ。明日の晩は歌留多會をするから是非來るやうにねといつてくれたよ』

『誰が？』

『僕の保證人の娘の芳江さんが……別嬪ですよ。色が白くつて、いゝ聲でね』

『結構ね』

『羨ましいですか』

と齋藤は笑つた。其の中に瓦斯にかけてゐた牛乳の沸く音がした。勢子がコップに入れてそれを出すと、學生は手に受け取つて、煙をふきながら熱さうにして飲み干した。そして銀貨入れを出して、

『カステラと、ワッフル、それに牛乳、いくらです？』

と云つて、勢子の手に代をわたして立上り、

『それでは御機嫌ようお年をお取りなさい』

『貴方も』

『有難う。そこでお勢さんはいくつになります。僕は二十五歳が、此一夜で終ります。感慨に堪へません』

『本當にね』

『あはゝゝッ……失敬』

齋藤は外に飛び出していつた。

『齋藤さんはお酒に醉つてゐましたね』

と左千子は齋藤のほんのり紅くなつてゐた美しい顔を思ひながら云つた。

夜は段々ふけていつた。二人はミルクホールの方の冷えるのに耐へかねて、雑貨店の方の帳場に上つて坐つて火鉢に手をかざした。

いつも人通りの少いところでも、大晦日の夜は流石にいつまでもざわ〳〵してゐた。それで勢子は此夜は起きてゐようと思つた。お主婦さんも松枝ももう炬燵ですや〳〵と寐てゐた。

左千子は目が冴えて眠る事が出來なかつた。

二人はビスケットを店から盆に一杯取つて來て、それを食べながらひそ〳〵と話をつゞけた。

いつか十二時が鳴つた。

すると眼を覺ましたお媼さんが舌のもつれるやうな大きな聲で、

『お勢、何、してるんや。もうお休みや……』

と云つた。

『あゝ』と勢子は生返事をした。

『大晦日やて夜通し起きて居らんでもよいわな。もうお寢や……』

とお媼さんは繰返した。

朝の來たのは間もなかつた。

勢子は裏の井戸に若水を迎へに出た。

『左千子さん、一寸來て御覽なさい。もう白みかけてゐますわ』

と呼んだので、左千子も裏に出た。

丘の上、眞東の空はうつすらと明からんで丘の樹木と、原のはづれに横はる衞戍監獄の黑い煉瓦塀とが新しい色に仄めいてゐるのが見えた。

『いゝ年を送りませうね』

左千子は敬虔な心となつて云つた。勢子は默つてうなづいた。

挿話の一つ

齋賀琴子

「ねえ、不思議な事があればあるものぢやありませんか」

私はお稽古の本包を其處へ置くよりも早く斯樣云つてまともに奥さんを凝視めたまゝ次の言葉をつゞけた。

「木村さんは停車場へゐらつしやらないんですよ、どうしても、汽車が出てしまふまで私一生懸命で幾度も〳〵調べましたんですけれど」

「あなた、見落したんぢやないの」

日當りの好い椽側で雜誌に讀み耽つてゐらした奥さんは事も無げに斯樣輕く仰云るきりでふり向きもなさらない、いつも本を讀んでゐらつしやる時の癖なんだと承知はしてゐるものゝ何だか冷淡に遇はれたやうで私は好い氣がしなかつた。

「否え、私今日だけは大丈夫、見逃しなんかしませんわ」

云ひながら私は冬枯れの寂しい庭に眼を投げてそれからそれと浮んで來る聯想を一つに結びつけやうとした。昨夜家中の者が寢鎭つてから私はお茶の間のお炬燵で木村さんと話をした、その時のあの人

の言つた事や擧動などが今思へば少し奇しかつたやうだ、大變昂奮した調子で木村さんは家へ歸るのが厭だと云ふ事だの、結婚に氣が進まなかつた事だの、兩親が壓迫すると云ふ事だの、とりとめもなく云ひ出して果にはシク〳〵聲を立てゝ泣いた。尤も平常から泣くかと思へば笑ひ、笑ふかと思へば泣く、恐ろしく感情に高低のある多血質の人だつたから、私はさ程氣にもかけなかつたやうなもののひよつとしたら愈、鄕國へ歸ると云ふその間際に急に魔がさして如何かしたのぢやなからうか、左樣思ふと「私は良人なんかちつとも愛しちや居ないのよ、大きらひなのよ」と肩を震はせて炬燵の上へ突伏したあの姿が眼に見えるやうだ。

「眞當に如何かなすつたんぢやないでせうか」

「まさかねえ」

とやう〳〵一つの小說を讀み終つたらしい奧さんは始めて顏をあげて、

「お友達の處で手間取つて乘り遲れたが、それとも上野から乘らなかつたのかもしれませんよ、ほら貴女が見送るつて云つた時そんな事仰云つてたやうぢやなかつたの」

「えゝ鶯谷から行くかもしれないつては云ひましたけれど——左樣ね、左樣でせう、左樣だとして置きませう」

私は何となく拗ねた樣な風を見せて、それぎり自分の室へ這入つた、そして日課の復習を始めるとすぐ、忘れるともなく木村さんの事は忘れて居た。

ところが其日の夕方お風呂場の戶をぎつしり閉めて溫かい湯氣にのぼせながら一心にお洗濯をしてゐたその時であつた、廊下の電話のベルがけたゝましく鳴り始めたかと思ふとやがて奧さんの秋田な

まりの調子が聞えて、意味は分らないが時々一種のアクセントを帶びた感歎詞がきれ〴〵に耳に這入て來る、「何處からかしら、もしか木村さんからぢやないか？」と思ふとすぐ私は兩手を拭く間ももどかしく廊下へ驅け出した。

「やつぱり左樣よ、お桂さん、木村さん歸らないんですつて、お家へね、歸らぬ委細手紙つて云ふ電報が行つたんですつて」と奧さんは少しせきこんで云ふ。

「それでねとにかくお父さんとお母さんがすぐ出かけて見えるんだそうです——當分またこの事件に卷き込まれるんですよ、お桂さん」と云ふ聲は一種の緊張を帶びて聞えたものゝこんな事件に既に幾度も經驗のある奧さんは、それでも靜かな落付いた態度でゆつくりとお茶の間の方へ步かれるのだつた、あとについて這入つた私は室中を明るくするタングステンの光が今夜に限つて妙にうす白くもの寒いので覺えず衿をかき合せた、奧さんは兩手を炬燵の中へ入れてじつと思案に暮れながら壁に向つて居た。

「先生に心配させるのはいやですからね、志郞をよんで萬事賴みませう、——ばあやお前早く御飯を食べて靑山まで行つて來ておくれな、志郞さんに少し賴みたい事があるからすぐ來て下さいつてね——木村さんがお歸りなさらないそうだよ」

「へえ——まあ左樣でお座いますか」

次の間の火鉢に炭をついで居たばあやさんは驚いたやうな呆れたやうな聲を出して障子のかげから覗きこむのだつた。

「寒いのに御苦勞ね、ばあやさん」

「否え、如何しまして、では桂子さんよろしくお願ひ申します、本當に木村さんはまあ親御さんの御心も知らないで――」正直者で同時に一徹なばあやさんはあとは小聲でぶつ〳〵云ひながらお勝手の方へ退つて行つた。

木村さんは大平洋に沿ふた海岸のある町の豪家の一人娘で一と月ばかり前からこの家に家庭見習ひのため寄宿して居たのだつた。ある外國人の宗敎學校を卒へてから目白の家政科へ入つて一年程寮舍に居たのを養子をとるために、中途で退學めて一たん國へ歸り結婚の式を擧げてから更に妻としての修業を整へさせたいと云ふ御兩親の希望で以前から僅かな縁故のあるこゝの家へ寄宿を賴んだのであつた。木村さんは髮の黑い色つやの生き〳〵した、どちかと云へば大柄な、はでな感じのする人で、氣性はと云つたら裏も表もないカラリとした、きさくな氣質だつた、どんな人とでもすぐお馴染になつてさわぎはしやぐので最初は人を措くと聞いて顏をしかめたばあやさんも結句賑やかになつたのを喜んだ位だつた。

「母さん、木村さんが居なくなつたの、え！」

「如何したの、何處へ行つたの？」

廊下の向ふの子供室の硝子戸がガラ〳〵開いたかと思ふとすぐ高い足音を立てて三人の坊ちやんが驅け出して來る、一番年上の倫ちやんは大き眼をクリ〳〵させて母さんの顏をのぞきながら

「ねえ、如何したんですつて、母さん」

「まだハッキリ分らないのですよ、坊や」

「だつてばあやが青山へ行くつて云ひましたよ、志郎叔父さんをよんで來るんだつて――面白いな

あ、叔父さん探偵になるんでせう」
「僕探偵になつてやらあ、僕巧いんだぜ母さん」
才はじけた治ちやんは投げ出した兩足をバタ〳〵させながら羽織の紐をいぢつて居る、末つ子の泰ちやんばかりはおとなしく私の膝にもたれて此頃漸く白く生へ始めた前齒でしきりと小指を噛んで居る。
「もふ御飯にしてやりませうお桂さん、今日は父樣御遲いんですから、ばあやが居ないんだから皆姉ちやんにお手傳ひするんですよ」
お膳立をするために行つてみると誰も居ない臺所にはさみしそうに電燈が光つて居た、硝子戸を鳴らす寒そうな風の音が身に沁みる夜だつた。
木村さんの御兩親はその晩の十時過ぎにお着きになつた。お茶やお火鉢を運び乍らふと見るとお母さんは眼を眞赤に泣きはらして身も世もないと云つた御樣子だつた。お父さんさへ前後の分別もなく轉倒した心持でゐらつしやるらしかつた、お相手になつてお話する奥さんもさぞお厭だらうに、志郎さんは何故遲いのだらう！と私は玄關へ出てみると丁度過然にも御門の鈴がチリ〳〵鳴つて植込のかげに背の高いそれらしい姿が動いて居る——
「大變遲いぢやありませんか、さつきお國からゐらつしやいましたの、お父さんとお母さんが」
「左樣ですか、ぢや姉さんは座敷！」
「えゝ、今およびしますわ、すぐ」

「一體如何したと云ふんです、事情は」

先へ立つてズン／＼お茶の間へ通つた志郎さんは外套を脱ぐとすぐ柱にかゝつて居る細長い鏡へ向つてネクタイをいぢりながら、丁度お座敷から出てゐらしつた奥さんを見て

「今夜は、如何しました、姉さん」

「どうもかうもありやしない、とにかくお前座敷へ行つてお話を伺つてみておくれな、生憎兄さんは今晩遲いんだからね、會があつて、なにしろ私にも分らないよ、あの通りふだんからはしやいだ人で秦を相手にダンスばかりして居ると云ふんだらう、別段深い考へがあつての事ぢやないだらうがね」

「一時の出來心ですか、飛んだ人騒がせをする木村さんだ」

微かに笑ひが同時に三人の唇に浮ぶのであつた、紹介の役目を持つてゐる奥さんが志郎さんと一緒にお座敷へ立たれたあと私はまた一人になつて何を爲やうとする氣もなくぼんやり手を束ねてゐた。昨夜はこの同じ室で木村さんとあんなに話したのだ！左様思ふと無暗にさびしい思ひがした。

翌日は雨催ひ空の陰氣な寒い日だつたけれど朝飯をすますとすぐ奥さんと志郎さんは上野の停車場へ取り調べに出かけられた、幸ひ奥さんの乳姉弟に當るTと云ふ人が構内監督をして居るので何かの便宜があるだらうと云ふ事だつた。丁度それと一足違ひに昨夜遲くなつてから宿へ引上げられた木村さんの御兩親が島田さんとか云ふ御親類の若い男を同導して見えられる、私はお稽古の出がけにそつとお座敷を覗いてみると皆してお母さんを宥めすかして居るらしい新派悲劇のやうなシーンが小さく

襖の向ふに浮き出して居た。

「なんでもね木村さんの御父さんは御養子なんですつて、それでお祖父さんがみつのありかを探して連れて來ない中はお父さんを家へ入れないつて仰云るんださうです」と昨夜奥さんが先生に話してゐらしつた事を思ひ出して私は氣の毒のやうな滑稽のやうな思ひがした、そして一軒の家に三夫婦も一緒に棲んでゐる田舎の家庭の有様が目に見えるやうにも思へた。「話の樣子が常始終圓滿に行つてる家庭ぢやないらしいよ、木村さんも隨分我儘らしいけれど、親達にも無理があるやうだ、なんでもお父さんはお母さんに頭が上らないんだらう、餘程具合が奇しいね」と志郎さんは云つて居た。「お家の方はみんな氣が轉倒してゐらつしやるんだからね、お前何とか骨を折つて探してやつて下さいよ」と世話好きな奥さんは自分自身の事でもあるやうにしみ〴〵した調子だつた。先生は「大丈夫だよ放つといても、四五日もする中には向ふから降參して出て來るだらう、まあお家の方の氣安めに搜索するんだね、こんな事件があんまり多いんで近頃はちつとも驚かない」と云つて苦笑してゐらしつた。何の爲の逃亡か！それに就ては樣々の意見が鬪はされたものゝ、木村さん自身の性格から推して考へると誰にも一寸した出來心としか見當がつかなかつた、それ程木村さんと云ふ人は一つの問題をぢつと凝視めて、考へる事の出來ない、刹那的の氣分に生きる深さのない人だつたのだ。人には憎まれないと同時に重大視される事も無いのだつた。もし一種の時代思潮に動かされ、一寸皆を驚かしてやらう位の好奇心からであつたなら——何だか私はつまらない氣持がした。

夕方家中の者がそれ〴〵の出先から歸つて溫かい食卓についた時はやつぱり木村さんの事ばかりが

話題にされるのであつた。停車場ではTさんが特別の好意を以ていろ〳〵の係を呼び出して尋ねたり、荷物の配達先を調べたりして下さつたけれど更に分らない、一人の赤帽の言葉では昨日の丁度九時時分に一見女優らしい若い女が暫らく待合室に居るのを見たが其後の事は知らないと云ふまるで雲を摑むやうな話なので一向とりとめがないのだと奥さんは先生に話された。

「それで如何した、志郎は？」

「友達の家を尋ねるつてすぐその足で行きましたのですよ、麻布とかに大變親しい友達があるんですつて、それから目黑と本郷にも――あんな人ですから男の友達も大分あるらしいやうですわ」

「御苦勞だね志郎はこの寒いのに」

「えゝあの男も根が深切者ですから、丁度今遊んで居る時で都合がよかつたのです」

「あんまりよくもないだらうよ、志郎にとつちや」

「叔父さん偉いねえ父さん、僕も探偵になりたいな」と治ちやんはお茶椀を下へ置いて眞面目に云ふ。

「なにしろ早くわかればよう御座んすねえ、お母さんが御可哀想ですわ」

「實際親の身になると違ふからね、――お桂さんなんぞもよく覺えて置く事だ、餘計な苦勞をさせるもんぢやないよ」

私は默つて笑つて居た、さしあたつて適當な言葉がなんにも思ひ出せなかつた、いつの間にか降り出した小雨が細かく庭の敷石に音を立てるのをきゝ入つて居た。

それからと云ふもの志郎さんは方々の友達の家と云ふのを尋ねて毎日々々歩かれたけれど何の手がゝりも得られなかつた、一緒に働かれる筈だつた木村さんの親類のその島田と云ふ人は歯科醫學校とかに通つてゐるので思ふに任せないと云ふし、御兩親はもふ半病人の體で宿屋に寢てゐらつしつて何分宜しく願ひますと手を合さぬばかりに泣きつくので今更厭と云ふ筈にも行かず一種の義侠心にも促されて志郎さんは朝早くから夜晩くまで――どうかすると十二時過ぎになつて雨に濡れて歸られる事なぞもあつた。

「叔父さんどうしたんだい、駄目だなあ、僕ならすぐみつけてやらあ」と治ちやんは叔父さんの手にぶらさがつて惡まれ口をきいたりした。お國の方でも氣が氣でないらしく警察の手を籍りたらどうか、新聞へ廣告したら如何かといろ／＼云つてよこされるのだつたけれど何故か御兩親は左様云ふ方法に氣が進まぬやうに見えた。そうして空しい日が一日々々と經つて行つた。

處がある日の夕方だつた、電話の取次に出た私は受話器をとるとすぐ聞き馴れた志郎さんの喜しそうな聲に驚かされた。

「木村さんの居所が分つたんですよ今――えゝたしかに――友達の家なんです、今寄席へ行つて居ないと云ふんですがね、僕達は――島田君も一緒です――家の前で待つて居て、這入るのを見屆けてあとからすぐ行かうと思ひます――お父さんの方へ、えゝ電話をもうかけたんです、すぐ出かけてゐらつしやるそうです。どうか姉さんに左様云つて下さい、なにしろ寄席のひけるのは十時過ぎなんでせう、それから一芝居やつて話をつけて、一緒に上野の宿まで行つてそして歸るのですから――ま、もう安心ですよ桂子さん」

さよならとも云はない中に電話はきれて居るのだつた、私は妙に落付かない氣持でとりあへず皆にその話をした。
「今頃活劇をやつて居るんですね」と皆は顔を見合せて笑つた、それはこの四五日來見られなかつた、無意味ながら親しい家族的な笑ひであつた。
「木村さんどんなお顔をしてるでせう」と私は我しらず興がつて輕い心持になるのだつた、がその晩おそく疲れて歸つて來た志郎さんをとりまいて一部始終の話を聞いた時、私は何故と云ふわけもなく淡い失望の感じを起した、欺かれてゐたことを始めて悟つたやうな腹立しい思ひもした。
「實はね、もふソロ／＼出やうかと思つてましたの」と志郎さんに向つて云つたと云ふ木村さんの言葉が口惜しくてならなかつた。
「だけど變ぢやありませんか、只氣まぐれにこんな事をするつて」と詰問るやうに私は志郎さんに云つた。
「それは理由はあるんでせう、養子が氣に入らないと云ふ。だがそれも大した事ぢやない、少し强く出られゝばすぐ泣寢入りになるんです。全體が間違つてる話ぢやありませんか、一度自分も承諾して結婚して、一と月も一緒に暮してゐたあとで理由もなく厭だなんて、あんまり男の面目を侮辱すると云ふものです、ちつとも眞面目ぢやない、僕は第一あの女の風俗からして氣に食はない」
いつも穩かな志郎さんは珍らしく激昻した聲を立てゝかう云ふのだつた。
「そして木村さんはおとなしく歸りそうな樣子！」
「歸るでせう。一體その葉村つて云ふ友達が怪しからない奴でいろ／＼木村さんを煽動したらしい

んですが――まあこれで覆水盆にかへつて四海波靜かに納まりがつくのでせう。電話をかけた時にね丁度お湯に這入て居たお父さんが裸體のまゝ驅け出すとそれまで腰の立たなかつたお母さんがいきなり跳ね起きて廊下へ出たはいゝがあんまり慌てゝ二階から轉げ落ちたんだそうです。木村さんの顔を見ると最早叱るも咎めるもない、死んだ者が生き返つた歡びやうで、私達第三者はもふ御用なしの有樣です――あ、左樣〳〵明日此家へ挨拶に來るつて云つて居ましたぜ」

「何時頃、晝間、――ぢや父樣はゐらつしやいませんねえ」と奧さんは疲れたらしく横になつて目を閉ぢてゐらつしやる先生をふりかへつて云つた。

「丁度いゝさ、逢つたところで仕樣がないだらう」と起き上つて敷島の一本を執り乍ら先生は笑つた。

翌日の午後木村さんはお父さんとお母さんとその外親類の方五六人に護られて悄然とした態でゐらしつた。私を見るが早いかいきなり飛びついて手を握つて、

「桂子さん、御免なさいね、御免なさいね」と眞赤な顔をしていくらか極りが惡そうに低い聲で云ふ、大柄な横縱じまのお召の着物に同じ飛びがすりの羽織を着た、此間出て行つた時そのまゝの姿が何となくいぢらしく憐れつぽく見えて、私は妙な感慨に打たれた。

「おみつや、お前奧さんに御挨拶をおし、さつさとしないと汽車の間に合ひませんよ」と座敷からお母さんの聲がする、

「ぢや今日すぐお歸りなの、木村さん」

「えゝ、歸らなきやならないんですつて、桂子さん、私は本當に不幸な身の上よ、だけど歸つたつて皆の云ふ事なんぞ聽いてやらないからいゝわ、私は何處までも自分の云ひ分を通すからいゝわ、母さんもね歸りさへすればどんな事でもきいてやるつて云ふの」

左樣云ふ木村さんは非常に氣が立つて居て前後の判斷をつける餘裕は少しも持たぬらしく見えた、常軌をはづれた感情のために理知の眼は眩んで居るらしかつた、だがこの場合第三者——知己としての第三者から何と云つたらいゝのだらう。

「まあお大切にね、木村さん、なほよくお考へなさいね」

私はこんな漠然とした言葉しか口へ出なかつた、木村さんの心持へ深く立入つてとやかく云ふべき折でもなかつたし、第一そんなに深入る事が私には恐ろしかつたのだ。私は默つて木村さんの髮のその赤い寶の簪をじつと眺めて居た。

「まあ本當に結構で御座いました、御大切にどうか」

奧さんは丁寧にかう云ひながら一同を送つて出るのだつた、木村さんのお父さんもお母さんも昨日までは別人のやうにいかにも幸福そうに笑つてゐた。そして兩方から木村さんの手をしつかり掴へたまゝ、門を出て行かれた。

それから凡そ一月ばかりの後木村さんの家から小包が屆いたので開けて見ると其土地で造る蒲鉾の幾つかで洋紙で包んだ一つには志郎樣一つには島田樣と書いてのしがつけてあつた。

「お禮のおつもりなんでせうが島田さんの處へ屆けてあげたいにも所が分らないし、困りましたね」と云つて居る丁度その日の夕方島田さんがポツリと尋ねて來た。

い顔をした、

「なに手紙が來たんですよ、××さんへ送るから受取りに行つてくれつて」と島田さんは不服らし

「島田さんは千里眼ですね」とばあやさんが笑ふと

「わざ〳〵ゐらしつたのですか、ぢや割に合ひませんね」

「とう〳〵蒲鉾でけりがついたわけですね」

「蒲鉾事件つて云ひませうか」

と皆は意味もなく笑ふのだつた、

が其後の木村さんは如何したらう！一年經つた此頃、日曜なぞにちよい〳〵訪れる島田さんの話によれば今では赤ちやんさへ出來て無事におさまつて居ると云ふ「すつかり眞黒な田舍女になつちまいましたよ、當年の俤は見るべくもあらずで」と云つて島田さんは寂しそうな顏をした。

後の涙

岡本かの子

せきかねつとどめかねつつ別れたる後の涙ぞ眼をいためけれ。

何も見じ君と別れて眼を病むがなかなかにこそうれしかりけれ。

しばだたきうちしばたたき病める眼のかわきもあへず君想ひつつ。

君行ける空いづこぞと仰ぐさへえこそかなはじ病みいたむ眼は。

いゝ、ひとめだに君の見えずて病める眼につれなく空の晴れにけるかな。

逢ひたやと泣く涙みな毒としもなりて我眼のいたみ續くか。

病める眼にうらなつかしくやはらかく黄昏の來て月見草咲く。

病める眼にそつとのぞけば黄昏のくさむらがくり咲けるしらぎく

一滴の水薬(すいやく)ややに泌みて行く病む眼閉ぢつつ虫の音を聞く。

虫なくよひとり都にのこされて病める女を知るや知らずや。

水薬(すいやく)と涙のしみの交りたる紅き手布も眼なれてぞ病む。

眼閉づればひとしほ我になつかしく親しく近しなく虫の聲。

君來まさず宵のままなる羅にやや肌寒しこほろぎのこゑ。

○雲ただよへり

いつの間にかゝふ針の手を忘れしや忘れて何を思ひ居し我ぞ。

山茶花のうらさびしげにつつましく咲けるよ今日はわれも針持つ

いとせめて眼にあえかなる布刺さばすこし慰むわが淋しさか。

針持てばいつか小鳥の我軒に來て啼く冬のあたたかき晝。

わが指の針もいつしかしくしくと泣くかとぞおもふ胸のいたけれ。

戀しさも悲しさもまたあきらめてもつれし糸をしばしほぐすも。

あふれ來る涙おさへつとどめつつ實にこの衣も幾夜縫ふらん

母も居ばかたえに縫はん君も居ばかたえに文も讀みてんものを。

あまりにも思ひ無げなや新らしき襟ぞ揃ひぬこころ惜けれ。

糸くづを揃えても見つ三筋ほど赤きをなかに數へなどして

雲見れば雲間にもただよへりと見る間にまたあふるる涙。

新文明に於る婦人の地位――アール・バーチス

岡田幸子譯

個人の集團がこの時社會に於て有する地位は二つの要素に依て定まる。二つの要素の中一つは集團の屬性にして、他の一つは其の當時一般に行渡れる觀念である。此の二つの要素中、肉體的にして主觀的性質は他の物に比して重要である。普通これを呼んで生理的要素と云ふ。

これを定むる事は常に困難なるも、しかも動す可からざるものである。これは生命の事實を語るものであるが故に、力强いのである。其の變化は急速ではない。そして社會觀念がこれと一致しない場合には、その觀念は如何に論理的に且つ立派に基き上げられたものでもやがては觀念も亦動される。

然しながら一時的ではあるが、社會上の地位を占むる上に於て甚だ有力なものである。たとへその觀念が一階級の自然的、主觀的事實と一致しなくても、それに依て妨げられない。過去に於て觀念は善惡を問はず僧侶を崇拜した。又觀念は或民族を奴隸とした。或時は白人が黑人に對してなしたるが如く、劣等民族を奴隸とし、或時はローマがギリシャに對してなしたると同樣に優越民族を奴隸とした。此の觀念も變化はしたが、動化の速度は遲々として進まなかつた。然しながら產業革命、軍事革命の時驚嘆す可き速度で動いた。かくの如くしてアメリカ奴隸制度の場合を考へてみるのに、奴隸に

對する一般觀念が變化を起し、それ迄は動產と同一視されて居た黑人が、急に數日間の内に白人と等しき市民になつた。然しながら此の變化は全く社會觀念の變化であつて、奴隷の肉體的、精神的性質の爲に起つた變動ではない。

これに由てこれを觀れば、一つの階級が實際に有する性質と何等の交渉を持たずして、觀念のみが其の社會上の地位を定むる事のあるのは、明々白々な事である。勿論觀念は原因がなければならない然しながら其の觀念が一度言葉に現されると、其の觀念を作つたところの條件が全く消滅した所迄も猶、長く古き觀念が殘る事がある。又或る觀念は蒼海を越えて送られて行く場合もある。そしてかゝる觀念の起る可き條件の全く備つてゐない所で、全く異つた人々の間に遵奉される事がないでもない。實際上の事實は、かゝる觀念を如何しても是認する事が出來ない場合でも、其の觀念は迷信、宗敎上掟の多くは長い間の習慣に依て非常に熱心に信せられた事がある。そしてその觀念を奉ずる社會に於て、その觀念は事實に適せざる事を感得し、それが破壞されやうとする時でさへも該社會の人々はかゝる不必要な觀念を如何かして保存する爲に一生懸命に爭ふ事がある。投票、土地、富裕、先祖傳來の特權を獨占せる英國の貴族に對して、英國民の大多數は崇拜の心を今尙持つて居ると云ふ樣なのは前述の一實例である。

婦人の地位を判定する上に於て、上述の困難の一層顯著なるを認める。其の判定の上に困難を來す來實を考るに、性的關係を研究する場合には一般に感情が人の心を支配し、心の活動を不明ならしむるからである。而して其れのみならず婦人に對する信念慣習の變化は、男女の別なく、日々の生活狀態又び利害關係を擾亂するからである。故に性的事實の智識が制限されて居るのは、あやしむに足ら

ぬ事である。また新舊概念が全く混合し、且つかゝる過渡期にあつては、其の觀念を肉體的、精神的事實と對照して見る事等は殆どない。

最近四十年間婦人の肉體的、精神的性質は注意深く解剖研究されて來た。或る研究者は何等の偏見に暗まされず公平に判斷を下した。其の研究の結果を簡單に約言して見るのに、婦人は男子よりも丈低く、重さは輕い。婦人は男子よりも肩が狹く、腰は廣い。男子は肩より下の方へと漸次細くなつてゐるが、婦人は腰を境にして、腰から肩へ、及び腰から足へかけて段々細くなつて居る。婦人は男子よりも胴は長い。足と手は短い。兩腕、兩足の力は婦人は男子に及ばない。本來男子は婦人よりも運動に適した樣に出來てゐる。運動競技に男子の作つた記錄(レコード)を見るのに婦人の作つたそれよりも餘程優つて居る。耐久力に就いて見るのに婦人の一般の身體の構造が、男子よりも長い間立つたり、物を支へたりする事が出來ない樣に出來て居る。

文明の社會に於ては男の子の生れる數の方が、女の子の生れる數よりも一分か二分多い。けれども男の子の方が變化を受け易い。ゲーデス及びトンプソンの言葉に從へば、婦人は同化的である。故にライフの力を集合しこれを作る。そしてそれの保藏者である。これに對して男子は分解的である從つて破壞家たるをまぬかれない。

異つた方面から同じ事を云へば、婦人は男子よりも受動的であり、男子は肉體的に云つて婦人よりも自動的である。

男女兩性間の神經組織は、一般的に身體全部の上から云へば殆ど同じ大いさであり、其の性質上の相異は知るに由ない事である。生理學者は或る頭腦の切斷面を見ただけでは、それが男であるか、女で

あるかと云ふ事を判定する事は出來ない。男女兩性中他の一方のが出來る智識的の仕事は恐らく他の一方の者も出來るであらうが、婦人は男子よりも感情的であつて、男子よりも近い道をとつて結論に到達する。男子は婦人よりも論理と科學を好むのである。婦人の持つ智識的興味は、具體的で個人的であるのに男子のそれは非個人的で抽象的な問題に向けられる。

婦人の生涯は男子の生涯よりも時期を劃して進んで行く樣である。婦人は本來有する母たる資格に依つてのみならず、妻となり母となるに依て其の生涯は殆ど同じ長さの三時期に分割される。生涯を三分した其の上半期娘時代とも云ふ可きものであつて、此の時期は生活の準備に供せらる。其の中半は四十五、或は五十迄の時期であつて、其の期間には母たる事及び家族の問題が澤山集つて來るローマンチックの時期とも呼ぶ可きは此の時である。其の下半期は五十から七十五迄の間で、生命は過去に於て消耗され、老衰の時代である。

さて今や私達は、婦人の位置を定むる理想を考へてみるのに、混沌として統一を知らない。一八七〇年頃迄は婦人は肉體的にも劣等であると云ふのが定説であつた。婦人の精神的な點及び高き道德上の理想は時に男子も亦これを認めた。けれども婦人の社會上の地位は小兒と男子の中間にあるものとせられて居た。クリスト敎徒がかゝる信念を持つて居つたのは、ジユダヤ的クリスト敎が大に責を負ふ可きである。天地創造説に於てイーブは人類を廢滅の淵に沈めた。そして自分の娘達を常に猜疑の目で見る樣にさせた。

初期のクリスト敎徒は異敎放淫に反抗する上に於て、人生に對し行者的態度をとつた。その態度からして女は惡魔と手を握る危險物としたのである。クリストは生涯妻帶せず、従つて子供も持たず、

亦自分と共に働く者としては男ばかりを選んだと云ふ事實に基き、初期のクリスト敎會に於て婦人は男子に從屬したる地位しか得る事が出來なかつた。敎父の筆に成れる文書は、獨身生活を賞揚し總ての性的生活を疑の雲で包んでしまつた。武士道の發達に伴ふて、マリーオラトリーが起つたが、此の事も婦人を異敎徒時代の自由にかへすものではなかつた。唯、尼と貴婦人と女とをごつちやませにした觀念を作つた位なものである。

男子に依て作られたと云ふクリスト敎の敎義からして女は本來、其主人即ち男子よりも劣つて居るとせられ、保護者援助者として男子を見た。法律上、政治上に於て婦人は父、兄、夫から獨立したものとはされない。もし婦人が從屬して居る者よりも後に生き殘つた場合には、大きくなつた自分の息子に從屬するものとされる。女を所有してゐる男達は女を唯、自然から與へられた好奇心をそゝるものとして見る。女には智識の使用を禁止し、智識に近寄らせない樣にする。彼等は女に仕事をあてがつて其の仕事に依て得る所の賃金は皆自分達の懐にかき集め、女の小使錢は男達の間で分配してしまふ。女の性的生活は全く偶發的な結婚によるより外に道はない。女は結婚の相手を自分から探してそれを實現するのではなく、相當の男が結婚を申込んで來る迄、嚴肅な態度で待たなければならない。相手が求婚して來ない以上は、一生涯伯母さんだ、從姉妹だと云ひ、實は體の好い召使として暮さねばならないのである。

以上は過去の社會に於て婦人の地位を定めた觀念を簡短に述べたのである。時には婦人にして自己の卓越した才幹により、急進思想を抱いてゐる父の御影で或は男の拘束者がない爲に、普通の女たる地位を脱したる結果、智識の木の實を食し、自分の財産を所理し、自己の國土を治めた婦人がないで

もない。けれども殆ど總てのクリスト敎國の婦人は、自分の運命に對し何等不平を抱かず、女は一定の制限の元にある可きものだと自足して居た。

一八七〇年來、一般民主運動は新敎徒の革命、佛米の革命に刺戟されて、女の世界に迄其勢ひを及ぼして來た。機械の發明は現在よりも尙一層大きな政治的、社會的の空想を伴ひ、自ら甘ずる家庭内の古き婦人の位置を攪亂し、婦人をしていやが、をうでも一層廣い世界へ乘り出さなければならない様にさせた。其れ以來婦人自身及び男子にして婦人に同情する者は、婦人と社會との關係に就いて、新らしい觀念を發達せしめた。男女は各々個人として、社會を組織する一團體である。此の團體が强くなる以外に社會が强くなる道はないと彼等は主張した。婦人の精神作用は男のそれと全く差異はない。男の習得した總ての知識的な仕事は女だつて出來ない事はないと云ふのが彼等の言葉であつた。前には男が自分達の領分だと云つてゐた總ての產業にも、女はたづさはつて、決してひけを取るものぢやないと主張した。婦人は經濟上の獨立を得る上に於て自己と社會に負ふ可く、且つ婦人は法律上政治上男子の支配を脫却す可しと云ひ張つた。猶大膽な者は曰く「小供を望み自分の小供をはぐゝんでゆける婦人は、自分の望む父親を選擇する權利がある。」と

新舊思想混沌として統一する所知らざりし狀態より新らしい社會が生れて來た。少なくとも古き物は破壞された。近く四十年來、高等學校、カレッヂ大學の最高の行政を司る位置及び首班の敎師たる事は出來ぬが、其れ以外の敎育は男と等しく特別の機能を持つものとせられた。產業革命の援助空しからず、今や八十萬の婦人は亞米利加合衆國に於て賃金取として働いてゐる。法律の制定は男子と等しき經濟上の基礎の上にたてられた。故に婦人も自己の役務を賣つて賃金を得、自分の好むまゝに

金を消費する事が出來る様になつた。三百萬の婦人は米國に於て今や參政權を獲得し、其の他の者も近くこれを獲得するに至らん。かゝる間に彼等はクラブを作り、百萬以上の婦人は自己の特別な活動の爲に、亦自分達のプレチユーアの爲にそれに加名して居る。彼等は時に男子の援助を得るも男子との白兵戰に於ては常に勝を占めて居る。

過去四十年間に於て私達が得たる經驗に照し、婦人の特性の立場よりして、婦人の此の勝利を研究して見やう。

教育の方式に於ては婦人は、男子の爲に男子が建設した所に從ふて着々と歩を進めた。それは數百年來洗練された過程である。カレーヂ以下の殆ど總ての米國の學校では、男女共同教育である。男女の小兒は同じ様に教育を受けて居る。男子を分つて教授する場合でも教科書は同一である。カレーヂの多くのものも男女共同教育である。女子以外の大學を許可しないカレーヂ、例へばウエルスレエイバーサール、ブリアンモオール、スミスの如きカレーヂにあつても、男子のみのカレーヂと同じ課業を教授してそれを變改しやうと云ふ様な傾向は少しもない。

かゝる狀態の元にあつて婦人は、男子のする總ての仕事に對して能力を持つて居る事を表明した。優等賞を得る者もあつた。去年アメリカのカレーヂとユニヴアシテーとを合してＡＢの稱號を得た四十二パーセントは婦人であつた。しかも高等教育を受くるに至つた結果、婦人の健康が惡くなつたと云ふ證據は少しもない。今日米國中、教師の八十パーセントは婦人である。而して社會の知識が進めば進む程女教師のパーセンテエヂは多くなるのである。マツサチユセッツの様な州や總てのアメリカの都市に於て小學校の先生に男子は殆どなく皆婦人である。

然しながら生理學者、心理學者達は猶、男女の精神活動には根本的な相異があると云ふ事に一致してゐるそして一般の敎育學者の云ふ所に依れば、現在の敎育には婦人の師導して居る事が明らかに現れて居ると說く。少なくとも婦人の影響の顯著なのは小學校であつて、全體として考へて見ると、讀本、話方、傳記、神話、語學に於て小學生が發達して居ると云ふ事は、いなむべからざる事實である。これに反して自然を對照とする研究及び一般科學は過去二十年間殆ど進步の跡を見せない。一八七〇年來米國の文明は科學的だつたのに係はらず、高等敎育を受ける學校に於て、女子は多く文學か或は文學がゝつた課程を習得し、科學或ひは科學的な基礎の上に立つてゐる問題、例へば機械學、建築學の如きを學習する者は比較的少ない。此の場合にこれを確定的な證據とする事は出來ないが、明らかにさうした傾向があるとは云へやうと思ふ。

もし、これが事實としたら男子の企劃した男子の爲の敎育を婦人化し、男女兩性のいづれにも不適當な異形のものを作り出すよりも、婦人の敎育はもつと婦人の性質に適合した方面に向ける方がよくはなからうか。かくすれば、文明を發達せしむる上に於て、男女と云ふ二つの正當な優越した役割を務める事になりはすまいか。婦人は男子が計劃した總ての智的活動をなすのに、不能ではないと云ふ事は確かに承認する。而して男女各々が敎育上貢獻し得る最高價値を婦人に自由に探求せしむるが好い。かくして男女二つの分野は各種の方面で重なり合ふであらう。そうすれば男性的な婦人は獨、主に男がする分野で仕事が出來るし、女性的な男子は婦人の分野で仕事をする事が出來る。

再言するが、産業方面に於て婦人は種々の職業に適應した能力のある事を示してゐる。然しながら長く立ち働いたり、物を支へて居るのは婦人に甚だ惡いと云ふ事を私達は發見した。女の店番には席

を設け、女子には夜間勞働を禁止し、勞働時間を短縮すべしと云ふ事は、男女のきらひなく一致する所である。過度の勞働から婦人を保護すると云ふ目的の元に設けられる立法は、自動的に或種の仕事に就く事は出來ない。然し婦人の古き職業は現存してゐないから、それにもどる事はしない。單に多く生產すれば勞働者は廢滅してもかまはないと云ふ議論はどうしても成立たない。輿論が上の事實を認むるに至つた今日、總ての職業は未來に於て、多大の變化を受けざるを得ないのである。

男子に適したる仕事、女子に適したる仕事の分界線を何處に置くかと云ふ事は結局、今日から豫想する事は出來ない。恐らく敎育に於るが如く、男女兩性に通ずる大きな分野が出來るに違ひない。然しながらかくしてゐる中に、近代的產業に於て婦人は如何なる仕事に最も適するかと云ふ事を聰明なる女は發見するに違ひない。若い娘は肉體を强迫する樣な仕事をさける樣になるに相違ない。而して敎育界に於るが如く、私逹は調和のとれた仕事に從事する樣になるであらう。すれば男女互に競爭すると云ふ事は絕對に起つて來まい。

政治的方面に於て私逹は同じ狀態に面接して居る。金を取る上に於て法律上の權利を持つてゐる獨立の勞働婦人は、公生涯を如何なる方面に導くかと云ふ事を決定する爲に、大に關與する資格がなければならない、然しながら婦人は家庭の作り手であり、小兒の母であるが故に、今日迄男子が社會的立法と云ふて來たそれに、大に利害得失を持たなければならない。これに反し彼等は行政、財政、國防等に關しては利害關係は男子よりも少ない。然しながらこれとても一方的支配關係、換言すれば男性的行政がこれ迄餘り長い間勝ち過ぎて來た。婦人も公務に對して未來大に貢獻する所があるであらう。而して其の貢獻は絕大なる價値を持つ樣になるであらう。此の場合に於ても多くの公的活動は男

女重なり合ふであらう。或る男女は反對の異性と相爭ふに至るだらう。然しながら人間生活の全體でなく、わづかに其の一部である世界で男女が相爭ふよりも、男女の各性に特別な方面に於て各々貢献せしめる樣に努力しなければならない。

婦人の私的及び交際的方面に於ては、前述の方面よりも過去數年間に於て、激しい變化は起らなかつた。男子と等しい教育的利益を享受し、投票權を有し、自己を養ふのみならず、自己の家族をはぐゝむ位の經濟上の獨立を得てゐる者は、女教師と婦人速記者であるが、これ等の人々でも交際の事になると、前時代の婦人即ち彼等の母の時代と同じである。かゝる婦人連が、自分と同じ、職業者の州會に出席する場合出來るならば他の婦人と誘ひ合ふて行く。婦人はホテルの控室や、料理店や、芝居に行くのをさける。殊に一人の場合はさうである。澤山の人の居る卓子か、亦は列車中で前に腰をかけゐる男の人と會話を交へる事や、男子と芝居に行く事は兎角に遲疑する。然しながら男子は市內電車に乘つてゐる場合でも、同じ事を極めて自然にやつてのけ、いさゝかも躊躇する事がない。婦人が社會習慣に對した場合、公衆の面前で煙草をのむと云ふ位の事でさへ、同じ罪を男が犯した時よりも倫程ひどい罰を喰はされる。

男を主動的にし女を他動的にする或るものが、男女の性質中にあるとしたならば、婦人にして智識職業に從事し、男子に對抗して政治上の競爭に參加すると共に、舊き社會の特權、換言すれば性の安全を保つて行かうと云ふ場合、婦人が自分と社會とをうまく調和させて行くのは非常な困難である。これはいなむ事の出來ぬ事實である。

初めてカレーヂに入り、亦は職業に付いた婦人は、其處に止つてゐる事は出來ない。尙進んで一身

上の自由を得る爲に運動しなければならない。新らしい社會の需要に應ぜんとする婦人にして猶古きかたにはまつた社會上の保護を要求する者を私共は散見する。婦人と男子と接近交際するのを避る樣に長い間こしらえ上げられた秩序をひどく破壞せず、しかも婦人の社會的解放を完成しようと云ふのには、深い洞察となる手腕が必要である。さうかと云つて此のまゝでは居られない。やがて取る可き階段はこれである。

此の小論文をしめくゝつて云へば、今や婦人は古き世の中から脫出して、拘束なき土地に彷徨してゐる。しかも彼等は肉體的にも精神的にも相變らず婦人である。此の事實だけは現在の理論と偏見とが全く忘却されても後に殘るであらう。婦人が新たに參加した方面で、彼等の前衛は專ら男子と競爭して居る。男子はする必要のあるものは總てしてゐるのであると嘗て主張した。故に男子に今迄自分等の獨占してゐたものをやらせる前に、婦人は男子の仕事に對して其れをする丈けの能力があると云ふ事を婦人自身立證する必要があつた。今や其の結果はわかつた。そして異性間の競爭は無用な事である。然しながら其の內に次に取る可き階段に對し道が開かれて來た。かくして男子は敎育に、產業に、政治に、有機的社會に於て相互の機能を定め、互に自由に働く事が出來る。

――大正五、一一、二六――

しろ椿

櫻井八重子

吾が心日と共にあり雲たちてかげろふ時ぞ戀わたるらむ

戀し戀し八千代なげき千度いへどこの心はもたらず顔なる

見じと今ちかひしものをこれやこの戀のならひか逢見むといふ

涙こそあら恥しく目ぬすみつもの縫ふ小手に玉と散りかゝる

戀心おのれ〳〵の上に着つも相見じなどゝさかしごといふ

はたたがみ吾が頭の上に鳴り渡れその時ばかりおもひわすれむ

吾が目やる椿の梢白玉のかゝるかと見えて花ぞ咲きける

白椿いとしいとし花吾が住まむ墓の上に散れ墓の上にまろべ

ほの〳〵と椿息つき白椿汝が息吐けば夜明くるものか

春來ると子は嬉びてある夜かも其子の良をみつゝ吾が泣く

春たたば山もせ野もせ草葉萠えむかなしわが戀萠ゆべくもあらぬ

ひとりの妹悲しげに泣き粉雪ふる抱きやらまし吾も共に泣かむ

いとしやと妹が背をなでやればこややつれしと吾も泣く泣く

妹よ姉はそなたと共にあり共にぞ死なむかたみに泣かむ

三味線を弾くま弾くまにもの思へど撥はこゝろの外の音たつる

松風

山田邦子

木枯風の吹き衰えし宵寒し夕餉かこめば三ツ葉のにほひ

吹きひゞく松風寒したゞ一人土手の夕日に添ひて歩めば

松風の吹きしくなかに夕日さし此長き土手に人も見えなく

老松の一つ切られし大株の目だちてさびし此並木土手

大風の日もあらなくに栗の葉はみな落ちてゐぬ霜月晦日

停車場の積荷のなかに何ならし青塗の箱一つ
目にたつ

ていしやばの積荷のなかにさらされて此青き
箱は三日あるかも

うつせ身の我身愛しみ神經の病ひとなりぬい
たはりかねて

わが顔に今日見る如きしいゝわ深め歩める人に逢
はぬものかも

其人にいとまなしてふ山田刈るひまだに婦は
いとしきものを

日の本の同じ都に玉ぼこの途ゆき人とならん
と思へばや

編輯だより

■光陰矢の如く、うか〳〵と遊びくらしてゐる中にお正月も早後に見るやうに成りました。一月號は編輯を主に造つて居りますものが病氣のために途々皆樣に見えるを得ず本當に本意ないことでした。

■二月號はビアトリスと云ふ雜誌を極めて高踏的なもの、單に同人の機關と云ふやうなものにしやうと云ふやうな相談から斯樣な薄いものにして仕舞ひました。その代り原稿は選んでゐますから、以前の厚いバサ〳〵した雜誌よりも内容に於ては充實してゐるつもりです。

■女性の發刊、ビアトリス社では如上のやうな雜誌を來る三月の一日から發刊します。そして廣く一般の女性諸氏からの投稿を募集いたします。委しくは別欄の廣告を御覽下さい。そして振つて御投稿下さることを希望いたして居ります。

■女性會々員募集、雜誌女性の定期講讀者（三ケ月以上前金拂込）を女性會々員と致します。女性會會員に頒布する雜誌に限り一ケ月に一枚づゝ特に添削券をつけて置きます。其他文學上の種々の質疑に應じます。

■女性の内容は今迄のビアトリスの内容に加ふるに文壇諸家の創作及び評論を以てし、尙他にも有益なる記事を多く掲ぐる豫定です。

■これ迄のビアトリス文藝研究會員と云ふのは女性發刊と同時になくなることになります。そして女性會會員と云ふことになります。どうぞ皆樣もお友達お誘ひ合されぞく〳〵御入會下さい。そして新しく生れる我が女性を刮目してお待ち下さい。

■尙今後雜誌講讀御申込の時は『女性』或は『ビアトリス』と明記して下さい。

■今月の誌上にはビアトリス社詠草を除きました。尙今後ずつと除くことになります。今迄の詠草の方へ御寄稿下さつた方は今後はどうぞ女性の短歌欄へ投稿して下さい。そして其優秀なるものは又女性本欄及びビアトリスへ掲載いたします。

■今迄文藝會員の方の原稿のお預りしてあるのは三月號の女性に頂くことになりました。皆樣どうぞ其つもりでゐて下さい。

一月號寄贈雜誌

スネーク、ろざりよ、星座、淑女畫報、趣味の友、金泥。

雜誌規定

□每月一回一日發行

□定價一册貳拾錢（郵税壹錢五厘）

□前金購讀料　三ケ月分（六拾錢）　六ケ月分（壹圓拾五錢）　一ケ年分（貳圓三拾錢）

□廣告料一頁　特等（參拾圓）　壹等（貳拾圓）　貳等（拾五圓）　三等（拾　圓）　半頁（五　圓）

□郵劵代用は壹錢貳錢に限る（但し一割增）

□編輯、經營、會員申込の事務は一切ビアトリス社宛のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす

大正六年一月廿八日印刷納本
大正六年二月一日發行

編輯兼發行人　東京市牛込區築地町六番地　山田たづ

印刷人　東京市麴町區紀尾井町三番地　金澤求也

印刷所　東京市麴町區紀尾井町三番地　元眞社

發行所　東京市牛込區築地町六番地　ビアトリス社

發賣所　東京堂　東海堂　東明堂　北隆館